

## メッセージアウトライン マタイの福音書5：6~7 「義に飢え乾く者、あわれみ深い者」

[6]「義に飢え乾く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです」

ここでイエスが言われている「義」とはどのような意味であろうか。「義」とは一般的に言えば、

正義、道徳的正しさ、人の道として当然行うこと、利害を捨てて人道、公共のために尽くすこと、自由と平等などが考えられる。そして聖書は信仰によって罪ある者が神の前に義と認められること(ローマ3:21-23)を教えているが、これは依然として「義」の説明ではない。義の反対は不義であり、神の前に罪ある状態である。しかし、最初に神によって造られたアダムとエバがエデンの園でまだ罪を犯す前は、彼らは神の前に義の状態であった。すなわち神と自由な交わりができ、会話もできた。隠れることも、隠すことも何もなかった。神は彼らにエデンの園を耕させ、管理させたが、そこは何不自由のない楽園であった。アダムとエバは神に造られた者としてたった一つの命令が与えられた。→「神である主は人に命じられた。『あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。』」(創世記2:16-17) しかし、その後で悪魔が彼らを誘惑した。彼らは「あなたがたは決して死にません。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです」(3:4-5)との悪魔のことばに従ってその木の実を食べてしまった。彼らは神を信じず、疑い、神に従うより、悪魔のことばに従い、神のようになろうとしたのであった。その結果、彼らは神のようになるどころか、楽園から追い出され、死すべき者となり、この世界は呪われてしまった。これは神話や寓話、童話ではない。真実の出来事である。

アダム以来のこの罪の歴史と神の呪いは今日まで続いている。人間は神のかたちに造られた者として、良いことを行うこともできるが、その心は罪に汚されているので、あらゆる悪の思い、悪の働きが出てくる。昔も今もそれは変わらない。盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさ等々、すべては人の心から出てくる。→マルコ7:21-23 それは社会を汚し、世界を汚している。かつて人間はこの世界はだんだんと進歩、進化してやがては理想的な社会、ユートピアが実現すると考えていたが現実はその逆で、ますます人心の乱れ

による混乱と不平等、犯罪の増加、戦争と戦争のうわさが渦巻く世界となって来ている。

すべては私たち人間が神との正しい関係にないことから始まっている。私たちと神との間にある罪という問題が私たちを神から隔てている。このままでは神に近づくことができない。

それゆえ「義に飢え乾く」ということは神と正しい関係を持ちたい、罪から解放されて人間本来が持っていた神との正しい交わり、正しい関係に再び立ち返らせていただきたいと切に願うことであり、そのような人は幸いであり、「満ち足りるからです」とイエスは言われる。これは単なる気休めではなく、人間の罪の解決、罪の贖いのためにこの世に来られた神の御子イエス・キリストによって実現するのである。  
→詩篇42:1-2、ヨハネ7:37-38

[7]「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです」

「あわれみ深い」ということはどのような意味であろうか。

これは他人の苦しみに同情し、いたわろうとする心にあふれている様子であり、人の行うことを、それが悪いことであっても単に微笑み、困ったもんだと受け流すような態度ではない。

あわれみとは他人の苦しみや悲しみに対する内的同情心とそれに対する外的行動であるともいえる。→ルカ10:30-37良きサマリア人のたとえ

神に仕える祭司はエルサレムからエリコに下る道で、強盗に襲われ、倒れている男を見ると道の反対側を通り過ぎて行った。(10:31)

同じように、神の宮で祭司のもとで働くレビ人も見て見ぬふりをして道の反対側を通り過ぎて行った。二人とも真の神を信じ、神に仕えているはずの者なのに、である。彼らの読んでいる聖書(旧約聖書)には憐れみということばがないのであろうか。そうではない。数えきれないほどある。

→創世記19:16、出34:16、申命記13:17、Ⅱサムエル12:6、エズラ9:8、ヨブ8:5、詩篇40:11、

箴言28:13、哀歌3:22、エゼキエル16:5、ダニエル9:9、ホセア11:8、ヨエル2:13、ハバクク3:2、ゼカリヤ1:16…他 彼らは聖書的知識はあっても行動がともなわなかった。

次にやって来たのはサマリア人であった。サマリア人は異邦人とユダヤ人の混血で、純粹のユダヤ人からは嫌われていた。そして倒れているのはユダヤ人であ

った。それならなおさらその場を通り過ぎて行ってもよかったであろうが、なんと彼はその人を見てかわいそうに思い、近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って介抱してやったのであった。さらに、翌朝彼はデナリ二枚(今日でいえば約2万円相当)を宿屋の主人に渡し、介抱を願い、もっと費用がかかったら、私が帰りに払いますと言って出て行ったのであった。この三人のうち誰があわれみ深いかということは言うまでもないであろう。

あわれみはただかわいそうに思うだけではなく、実際に行動が伴う。それは時間も労力もお金もかかるかもしれない。しかしそれは実際に相手が苦しみ悲しみ、悩んでいる状態から解放するために何かをすることであり、そしてこのような人があわれみを受けるのである。

しかし、誤解してはならないことは、「私が神からあわれみを受ける条件は私が他の人に対してあわれみ深くあることだ」と考えるならば、それは自分の行いというものをしてこにして神からのあわれみをいただくことであり、本末転倒である。あわれみの思いは、本来神が私たち人間に備えてくださったものであり、良きものであるが、これが人間的な打算や自己中心の思い、偏った考え方などによって発揮されないこともある。これがこのたとえ話に出てくる祭司、レビ人の姿である。

しかし、信仰者である私たちはすでに神からのあわれみを受けた者であることを忘れてはならない。

神はそのひとり子イエス・キリストを私たちの罪の贖いのためにこの世に送ってくださった。→ヨハネ3:16

信仰によってこのイエス・キリストを自分の救い主と信じる者は誰でも救われる。神に反逆し、神の前に何の勲もない罪深い自分が救われたのは、ただ神の大いなるあわれみのゆえだと心から信じた者は、今度は自分が神によってあわれまれたように、他の人をあわれむことができる者とされるのである。そしてそれを実行できるように内なる聖霊により頼み、助け、導いていただくことも大切である。→ガラテヤ5:22-23、ピリピ4:13

私たち信仰者は実際の生き方を通して、義に飢え乾く、すなわち神との正しい関係を熱心にしたい求める者、また神の豊かなあわれみを受けた者として、あわれみ深い者となっていきたい